

月田秀子の昨日、今日、明日…

12日間連続ライブ抄

10月23日、青梅のライブ会場「蕨蔵」開演前、ドンと突き上げられる感じのあと、かなり大きな揺れが続いた。ライブでのトークの中で「先ほどは、二階の控え室でちょっとはしゃぎすぎまして、かなり揺れたようですが……」なんて言っていたところが、新潟での地震だと知ったのは翌日の朝のテレビのニュースでだった。

新潟市内の「だいしホール」でのコンサートは、なんとその地震の前日のことだった。幸い主催者、関係者にはさほど大きな被害がなかったとのことだったが、延々と築いてきた日々の慎ましやかな暮らしを、一瞬にして奪われ途方にくれる老いた農夫のしわの刻まれた顔が心に焼きついた。その顔が祖母の顔に重なった。土地を奪われては農民は生きてゆけないのだ。

実は、母の郷里が新潟で、幼い頃、夏休みを何度か新潟の田舎で過ごしたことがある。母は9人兄弟だったので、食事の時はかなりにぎやかだった。広い家の中でかくれんぼをして走り回って叱られたこともある。蛍狩りをしたり、牛車に引かれて山道を走ったこともある。ある日、3歳年下の弟が「おばあちゃん、かわいそうだね。さっき、きゅうりととまとを捨てていたよ。」と言って、親戚中の失笑を買った。「あれは捨てていたのではなくて、畑でおばあちゃんが作ったのを、おまえ達に食べさせてあげようと、採っていたのよ。」と母が笑いながら言っていた。

雪が溶けて、春が来て、一刻も早く、今までの暮らしを取り戻すことができますように。

青梅のライブの翌日は、銀座「サンボアバー」でのライブ。マスターの新ちゃんとは、大阪ヒルトンプラザにあった「ハーレクイン」という地中海料理の店でファドを歌い始めた頃からの知り合いだ。ライブが終わってから、初代のギタリストY氏とよく飲みに行ったバーで、新ちゃんは、まだ新米のパーテナーだった。それが今では、大阪北新地と銀座の「サンボアバー」のれっきとした「顔」になっている。新ちゃんなんて呼んだら客のひんしゅくを買いそうだ。二十年ちかい年月、たくさんの出会いが彼を成長させたんだと思う。

堺「能楽会館」

モラエス生誕150周年にあたる今年、モラエスが半生を過ごし、かの地で生涯を閉じた徳島をはじめ、東京でも地味ながらさまざまなイベントが組まれた。わたしも個人的にモラエスには非常に惹かれるものがあり、なんとか彼の生涯を一人でも多くの人に知ってもらいたいと思い、堺の能楽会館でのコンサートの台本を作ってみた。台本の最終稿ができたのは、公演の前日の夕方だった。主催者側のスタッフに、昔の芝居仲間、「未知座小劇場」の丸山富夫、芳美夫妻がいた。富夫氏にはモラエスの語りを、芳美女史にはナレーションをお願いした。ご両人共、さすが昔とった杵柄、月田のたどたどしい語りを尻目に、説得力のある語りで、舞台を盛り上げてくれた。たった一台のスポットライトで、舞台上の3人を的確に追ってくださったボランティアさんと共に感謝。

当日、会場に着くなり、芳美女史が興奮気味に伝えてくれた。なんと、その台本の中で取り上げた、土佐藩士の墓の墓標を建てたのが、会場にあたる堺能楽会館の館主「大澤徳平」氏の直系のご先祖さま「大澤徳平」氏だったのだ。

彼は、その名前を襲名したのだそうだ。台本を読んで、徳平氏は体が震えたという。渡されたその墓標の写真には、確かに「大澤徳平建立」とある。その時点から、ただものならぬ空気が漂い始めた。

打ち上げの時、大澤徳平氏が「月田さん、きょうは何が良くて、暗いはしげの時、手のひらで舞台を叩くあのシーン、よくぞやってくれたと思う」と言われ、手の平に黒く痣が出来ているのに気がつき、その事実を認めたくらいで、ほとんどどのように叫びたか記憶にないことに、私自身驚いた次第。あの能舞台の持つ魔力のようなものにわたしは歌わされたような気がしてならない。

そういえば、新ちゃんとの再会を演出してくれたY氏も、今や日本でナンパーワンのポルトガルギター弾きとしてティナクレコードからメジャーデビューも果たしている。そして、ご両人とも共通しているのは、後進を育てているということだ。自分のことしか考えられないわたしとは全く違う。その是非は別として、わたしにはそれしかできない。弟子をとったり、愛好会もどきの組織からは遠ざかっていたい。なんてわがままなんだろうと思うけど、それがわたしの生き方なのだから仕方がない。歌うとき、聴いてくれる人と、その空気と対峙すること。その時、その空間に生きること、わたしの望むのはそれだけだ。痩せても枯れてもそうやって歌ってゆくのだろうと思う。わたしは、きりぎりす。蟻にはなれない。

一日空けて、神戸「あいり」、続けて関西での定期ライブ。「あいり」は満席の盛況。神戸のファド倶楽部の会員の面々の根強い声援に感謝。2月の新装オープンライブに駆けつけることを期す。

京都の「巴里野郎」、心斎橋の「アートクラブ」、南方の「三裕の館」台風の中、聴きに来てくださった皆様に感謝。

30日は、大阪を後に、「雷鳥」で福井へ。「サライ」というアートギャラリーの松村せつさん、初対面なのに何故か懐かしい。雨の中、会場は60名ほどの人たちで一杯。打ち上げの手作りの郷土料理に舌鼓を打ちながら夜はふけてゆく。前日の三裕の館に忘れた衣装を、わざわざ届けてくれたばちさん、名古屋から、福井に続いて、翌日の金沢まで「追っかかり」してくださった名古屋のTさんご一行様、ありがとう。

31日は、金沢「茶房犀せい」で、10年ぶりのライブ。今はなき渋谷の小劇場「ジャンジャン」の高嶋社長が連れてきてくれたのが縁だった。「ジャンジャン」は、高嶋社長の公言した通り20世紀で小劇場としての幕を下ろしたけど、「茶房犀せい」のボス（村井ママ）は、相変わらず血気盛んに「文化」とは何たるか、ひるむことなくわたし達に問いかけてくる。

そういえば、金沢の兼六園の前で、アルメイダ在日ポルトガル大使にばったり会った。化粧気もない、Gパン姿のわたしに「日本の美しい偉大なファディスタさん、まるで女子学生のようなだ」の一言に悪い気がするわけがない。

そんなこんなで、10月後半の12日間連続ライブ、地震と台風の合間を縫うように無事終了。

モラエスに関しては、会報42号で、辻雄二氏が「モラエスと神戸」というタイトルでかなり詳しく書いてくださっているので、記憶に新しいと思う。彼は、明治時代に、来日、神戸大坂ポルトガル領事を経て、亡妻ヨネの故郷徳島に隠棲、徳島でこの世を去るまでの31年間、半生を日本で過ごし、日本をポルトガルに紹介する「徳島の盆踊り」「およねとコハル」「日本精神」等の著作を残した。新田次郎氏が毎日新聞に連載、絶筆となったモラエスの生涯を綴った「孤愁・サウダーデ」という小説から概ねを抜き出した以下の一説から今回の堺での能楽堂でのコンサートを始めてみた。

『モラエスが神戸領事をしていた頃、神戸の外人墓地の一角にある十字架の墓碑の前で線香をあげている一人の老人と出会います。その墓碑は、慶応4年、堺で尊皇攘夷の土佐藩の武士20人に惨殺された11人のフランス人水夫の墓碑でした。事件後、フランス人を惨殺した武士のうち11人は切腹。堺の妙国寺に墓があるという。翌日、その事件に興味を覚えたモラエスはその老人に案内されて、堺を訪れました。その老人は、その事件に加わり生き残った9人の武士のうち一人だったのです。』という丸山芳美さんのナレーションに続いて、その老人は、日本人でありながらポルトガル人のモラエスに彼の「サウダーデ」を語り始めるのです。

あとは略しますが、このたびの堺でのコンサートで、「忘却」とは対極にある、「追慕の念＝サウダーデ」に生きたモラエスをクローズアップすることで「人それぞれのサウダーデ」を考えるきっかけになったらと思ったのです。それは、わたしがなぜファドを歌うのかの答えにつながってゆくような気がするのです。いつか、このテーマをもっと煮詰めて、コンサートをしたく思っています。2004年は、残念ながら恒例の年末のコンサートを開催できませんでしたが、きっと近いうちに、どこかで…。そのときは、きっと聴きにきてください。

マカオコンサートツアー顛末記

マカオへ旅立つ前の日、「なぜマカオで日本人のわたしがファドを歌うのか？」そんな問いが頭の中を占拠して、やっと2時を回ったところに眠りについたようだ。目を覚まし時計を見ると、4時過ぎ、目覚ましは6時にセットしてある。まだもう少し眠れる。そう思って布団をかぶり、又目を覚ます。また時計の針は4時過ぎだ。なんだ、又目を覚ましてしまったようだ。もう少し眠れと言いつつ聞かせ、布団にもぐりこむ。目を覚ます、同じ時間だ。おかしいかとカーテンをずらしてみる。なんと外は白々と明るい。「ひょっとして」と飛び起きて、リビングの時計を見ると、なんとなんと時計の針は、6時半をさしている。枕もとの目覚まし時計は4時10分で止まっていた！6時47分品川発の成田エクスプレスに乗るはずだったのに。なんてこった！パニックした頭で、顔を洗う。でも何とか間に合うはず、そう言い聞かせながら家を飛び出す。品川駅まで5分かからない。駅で一番早く成田に着く便を捜してもらおう。が、9時8分着だという。フライトは9時半だ。とうてい間に合わない。エーッとばかり、タクシーに乗り込む。「この時間だったら、渋滞もなく早く着けますよ」という運転手の言葉に安心したものの、乗り込んですぐの踏み切りが開かない。「この時間だったら大丈夫だと思ったのにな。ここは時間よっちゃ開かずの踏み切りなんだけど。あっちの道を行ったほうがよかったかな。」「ねえねえ、お願い、何とかして！」祈る思いが通じたのか、運転手は110キロぐらいのスピードで飛ばしてくれる。日ごろ都内をとろとろ走っている彼にしたら、たまのストレス発散になっているのだろう、運転手はるんるんだ。45分足らずで無事成田に到着。24,750円の出費は痛い。成田―香港間の往復チケットを30,000円たらずで手に入れた人もいるというのに…。ほやくことしきり。

往きは、東京からのマカオツアーの一行と一緒だった。寝起きの顔、ましてや、マカオでは、彼らの前で歌うことになっている身、気づかれないようにちいさくなっていったものの、香港からマカオに向かう高速艇の待ち合わせの時に、「ひょっとして月田さんでいらっしゃいますか？」ああ、ばれてしまった。あつという間に、御一行様に知れ渡ってしまう。ああ、アイブrouウくらい引いてくれればよかった。添乗員嬢が気を遣って、一人だけ早めに高速艇の待合室に行くよう手配してくれたがあとのまつり。「横浜で」「新宿で」「藤沢で」聴かせていただきました。マカオでのコンサートを楽しみにツアーに参加させていただきました。中には、杖を突きながら、「マヌエルであなたにぜひツアーに来てくださいといわれたので、家族共々参加させていただきました」というわがファド倶楽部会員の方もいた。みんなそれぞれの思いを託しツアーに参加しているのだ。

そしてその一部に組み込まれたライブに少なからぬ期待をもって下さっているのだ。すごいプレッシャーが津波のように押し寄せた。

幸い、旅行会社の好意的な計らいで、宿泊予定のホテルは彼らとは別だった。

迎えに来てくださったマカオ在住の渡辺氏の車で、まずはコロアン島にあるライブ会場の「ボウサーダ・コロアン」へ下見にゆく。竹湾という海に面した、古いホテルにあるレストランだ。ここでは毎年ファドのライブがあり、かなりのファド歌手がポルトガルからきて歌っているという。ミラーボールをはずしてもらい、ろうそくを用意してもらう手はずを整え宿泊先のウェスティンリゾートへ向かう。5時過ぎ、夕日が黒沙海岸のむこうに沈む頃、海に面したテラスで、空港で仕入れたスコッチを片手に、これからの一週間に思いを馳せた。成田から香港まで3時間半、香港からマカオまで1時間、日本人に囲まれての旅路ゆえか、外国にきた感じがまるでしなかったが、朝の一騒動の興奮とライブのプレッシャーから徐々に解放されつつあるのを感じながら、キングサイズのベッドに横になると、電話のベルが鳴った。渡辺氏からの夕飯のお誘いだった。

タイバ島にある、東京の「マヌエル」の本家「マヌエル」というポルトガルレストランに行くことにした。リスボンの下町によくある大衆的な店構えに、瀟洒な店構えを想像していたわたしは、少々面食らった。渡辺夫妻は、「こんなにお客がポルトガル人ばかりのレストランは初めてだ」と喜んでくださった。

あさりのワイン蒸し、エビのグリル、スズキの塩焼き、どれ

も、近海で採れたということで素材が新しく美味しかった。四谷の「マヌエル」開店時に応援に来ていたマヌエル・ペーナ氏も、よく訪ねてくれたとポルトガル人独特のはにかんだような笑顔で迎えてくれた。ヴィーニョ・ヴェルデ、アレンテージョの赤ワインがあったという間に空いた。食後にわたしはデザートに替わりに、いつものようにエスプレッソコーヒーとアーモンドのリキュール「アマルギーニャ」を注文。マヌエル氏はニタツと笑いながら、桜に似たアーモンドの花の描かれた「アマルギーニャ」のボトルからそのトロツとした液体をグラスになみなみと注いでくれた。最後にリスボンを訪れた日々が甦った。3年前の悲しいあの日々が。苦いアーモンド、Amendoa Amarga。そのリキュールを飲んで、甘いと言いつつ聞かせ、苦さを感じるのは多分わたしだけだろう。「Amendoa Amarga (苦いアーモンド)」の一節をわたしは心の中で口ずさんでいた。「あなたのために死んでも誰もそうとは思わないだろう。でも、わたしは待っている。夜明けの味のするあなたの身体を、失望の味がするあなたを。ああ、わたしの懐かしさも苦いアーモンド！」

翌日、ポルトガルの田舎町を思い出させるコロアン村を散策した。そこでわたしは、マリーザ (Mariza) のコンサートのポスターを見つけた。2003年度BBCラジオでベスト・ヨーロッパアン・アーティストを受賞、現在、ポルトガルだけでなく、世界的にも注目されているアーティストである。12月1日、2日とマカオの文化センターで開催されるという。行けるのはライブのない明日1日だけだ。マカオ文化センターに駆けつけたが、チケットは既に完売だった。以前、「日本のファド」というポルトガル衛星放送の番組の取材で大阪に来たマカオ在住のRuis Nestor氏に電話をしてみた。彼もチケットが手に入らないので当日会場へ行ってキャンセル待ちをするという。でも、君の熱意を伝えて文化センターの友人に掛け合ってみると言ってくれた。ところがその友人もチケットを手に入れられなくて困っているという。諦めるしかないと思っていたら、1日夕方一枚だけ手に入ったとの知らせを受けた。その日マカオ入りしたギタリストたちを渡辺氏に任せて、一人コンサート会場へと向かった。

マカオの町を歩いても、ただの一人もポルトガル人と出くわさなかったのに、コンサート会場は、ほとんどポルトガル人で埋め尽くされていた。編成は、ポルトガルギター、ギター、バスギターとファドのオーソドックスなバックに加えて時々パーカッションが入っていた。黒地に大きな花柄のロングスカートの裾にワイヤーの入った衣装で、くるくる回りながら踊る姿が、彼女の最新アルバム「FADO CURVO (ねじれたファド)」というタイトルを象徴しているように見えた。今後の公演は、そのアルバムの発売記念世界ツアーの一環で、すでに10カ国以上を回り、あとはロシアでの公演を残しているだけだった。身をよじったり、自らの肉体を開放しきって歌う姿は、最近来日したカティア・ゲレイロが腕を後に組んでひたむきに歌う姿とは対照的だった。もともとジャズ、ボサノバ、ロック、ゴスペル等のポップスを歌っていたという。しっかりしたリズム感に支えられた緩急自在な歌唱法は、最初はその技巧がちょっと鼻についたものの、それが、彼女の感性を通したファドの一つの表現形態なのだと思うに至って、わたしは素直に彼女の「新しいファド」を受け入れることができた。

会場を埋めた聴衆の全員が立ち上がり、新しい歌の女王に拍手を送った。最後のアンコールにこたえて、「伝統的なファドのスタイルで」とマリーザが言うなり、一つの椅子に、マイクをはずしたギタリストたち3人が片足を乗せ、顔を突き合わせるように弾き出した。マイクをはずしたマリーザが歌いだしたのは、アマリア・ロドリゲスが、カフェルゾのライブで歌ったあのファド「PRIMAVERA (春)」だった。CDで聴いたときは、もっと素直に歌ってもいいのにと感じていたが、生で聴くマリーザの声は、心地よく心に染み込んでいった。この最後の一曲で、マリーザは完全にその夜の聴衆の一人一人の心をつかみきった。私の目の前にいるのは、一人のファディスタというよりも、洗練された完璧なまでのエンターテイナーだった。「新しいファド」がその夜の聴衆の心の中にも生まれた瞬間を見た思いだった。

こうしてファドは新しい息吹を吹き込まれ甦る。アフリカのモザンビークで生まれたマリーザ自身のファドのバックグラウンドには、3才の時から育ったリスボンのファドの発祥地の一つであるモウラリアがある。けれど、アマリア・ロドリゲスがうだったように、彼女が舞台とする世界中の聴衆の心に「ファド」の種を蒔いているのも事実だし、リスボンやモウラリアを知

らなくても、「ファド」に心を揺すぶられ、魅せられる人たちのいる現実に、ポルトガルに生まれなかったわたしは大きな安堵を感じ、そんな日本人の歌うファドがあってもいいんじゃないかと思えるようになった。

ライブ2日目の夜は、ライブ終了後、ちょうど近くのタイパ島で開催されていた「FESTA da LUSOFONIA (ポルトガル語圏の祭り)」でのファドコンサートに繰り出した。ネストール夫妻も来ていた。なんとそこで花博のポルトガルデーでの公演終了後、当時首相だったカバコ・シルバ氏との会見の様相を取材したジャーナリストに再会した。歩いていると、「テレビでお見かけしました」なんて声をかけてくる人もいたりして、ちょっぴりいい気分だった。モザンビーク、アンゴラ、カボ・ヴェルデ、ギニア・ビサウ、サントメ・プリンシペ、ブラジル、かつてポルトガルの統治下にあった国々のブースがあり縁の人々で溢れかえっていた。

ファドのコンサート会場は、海をバックにした、まるでそこから唐十郎が出てきそうな、野外ステージだった。既に、コンサートは始まっていて、エルデール・モーターニョが歌っていた。若手実力派男性歌手カマネの兄弟(兄か弟か忘れた)だ。マイクの前に立ちほとんど動かない。結構トラディショナルなファドを次から次へと淡々と歌っていた。手拍子を求めるわけでもなく、全くむこうのスタイルだ。かなり歌唱力はあるが、少々飽きてくる。客は無表情に聴いている。本場と違って拍手のタイミングがかなり遅い。さすが亜熱帯地域、東京と比べると10度ほど暖かい、とはいえコンクリートの上に座しているとじわじわと冷えてくる。

次にアマリア・ロドリゲスと見まがうばかりの真っ黒いドレスで登場したのがマファルダ、若くて美人ファディスタの登場に、会場にはわかに華やいだ。

今回、東京から応援に駆けつけてくれた音楽評論家K氏もステージにかけよりしきりにシャッターを切っている。必死に客を乗せようとするが、どうも本国の乗りはでてこない。張り上

げた声は、むなしくスピーカーのみを震わしていた。CDで聴く限りではかなり生っぽいファドを聴かせてくれていたのに、観ると聴くとでは、かなりの違いがあった。ステージングが歌を裏切っている、そんな感じなのだ。ステージに必要なのは存在感だな、と思った。とはいえ、これだから楽しみな歌手だ。どうか、歌いつづけて、年輪を重ね、聴く人を唸らせるような彼女自身のファドの世界を構築して欲しい。そう、大切なのは、生きることを見つめながら、歌いつづけることなのだ。

12月2日から3晩、日本各地からマカオツアーに参加した人たちのために、ファドを歌った。異国の地、マカオに眠る殉教者たちのことを忘れぬ為に、もっと広げて言えば、無念の思いでこの世を去った人たちのことを追慕しながら歌った。はるばるマカオまでわたしのファドを聴きにきて下さった人のためにも精一杯歌った。今回のライブは、マカオ観光局(正式に言うと、「中華人民共和国マカオ特別行政区観光局」と、やたら長い)とワールド航空サービスのマカオツアーの中に組み込まれた、「ポルトガルの情緒溢れるマカオでファドを」という意図から組まれたライブであったし、そんな理屈は必要なく、歌い手としては、ただ、「聴いてくれる人がいるから」という答えで十分だったのかもしれないが…。

3日目の夜のライブには、チケットを手に入れてくれたネストール夫妻を招待した。ネストール氏には、「お聞きくださいワイン殿」の前にワインを持ってきてもらう役をこっそり引き受けてもらった。ポルトガル人の参加で、日本人観光客もびっくりしていたようだった。演出は大成功だった。そんなわけで、今回マカオツアーに参加して下さった150名近い人たちのマカオでの思い出のページの隅っこに、ファドライブの夜の思い出がワインの酔いと共に、少しばかりの熱いサウダーデを伴って残ってくれたら、何よりも嬉しいと思っている。

fados canções

CHEIRA A LISBOA

Letra-Carlos Dias
Musica-César de Oliveira

Lisboa já tem sol mas cheira á lua
Quando nasce a madrugada sorrateira
E o primeiro Elétrico da rua
Faz coro com a chinela da ribeira
Se chove cheira a terra prometida
Procições têm cheiro a rosmaninho
Na tasca da viela mais escondida
Cheira a iscas com elas e a vinho

Um craveiro numa água furtada
Cheira bem cheira a Lisboa
Uma rosa a florir na tapada
Cheira bem cheira a Lisboa
A fragata que se erge na proa
A varina que teima em passar
Cheira bem porque são de Lisboa
Lisboa tem cheiros de flores e de mar

Lisboa cheira aos cafés do Rossio
E o fado cheira sempre a solidão
Cheira a castanha assada se está frio
Cheira a fruta madura quando é verão
Nos lábios tem o cheiro dum sorriso
Mangerico tem o cheiro de cantigas
E os homens perdem o juízo
Quando lhes dá o cheiro a raparigas

リスボアにおいて

訳 カウド ヴェルデ

夜明けのリスボアになお残る月のにおいて
しのびやかに朝は訪れ
始発の路面電車の音が
河岸(かし)に働く人の足音と混ざり合う
雨が降れば神の恵みのにおいて
祭りの行列からはローズマリーの
人目につかない路地の居酒屋からは
モツ料理とワインのにおいが漂う

屋根裏部屋に一輪のカーネーション
いいにおい これがリスボア
中庭に咲く一輪のバラ
いいにおい これがリスボア
舳先を立てて進む小舟
押しつけ押しのけ通る魚売りの女
これこそリスボアにおいて
リスボアは 花々と海の香りに満ちている

リスボアはロシオのカフェのにおいて
ファドはいつも孤独のにおいて
冬には 焼き栗の
夏には 熟れた果物のにおいて
唇には ほほ笑みの
マンジェリコは 恋の歌のにおいて
そして 娘たちが振りまくのにおいて
男たちは分別を失くす

cartas

●大阪サンケイホールが来年夏に建替えの為、休館になるって新聞にでていました。仕事の都合で、行けなかった年もあったけど、この時期になると開演前に、桜橋界隈を散策したのを思い出します。

完全武装でも道中寒かった年や、ホールを出た後、月田さんのチケットが玄関で、濡れ落ち葉状態（何をやるんやなあ、可哀想で拾って帰って本棚の本に挟んで忘れていたのが、この前ひよこり出てきました）の雨の年もありました。

終演後、エレベーターが混雑するので階段で帰っていたら、お世辞にも上手と言えないファドの歌声。振り返ると黒田清さん。まだ御病気になる前の、恰幅の良い頃の御姿でした。それも、私と同じ御一人。あれ？たしか会長さんやのにと、不思議に思った事思い出されます。シャイなお人柄だったんでしょうか。一人でコンサートの余韻にひたっておられたんでしょうね。目が合ったのに挨拶もしなかった事が、今となっては悔やまれます。建替え後のコンサート、また楽しみにしています。

長々ととりとめのない事、書き込んでしまっていてゴメンナサイ。大阪はまだ厳しい寒波は来ていませんが、これからが冬本番。月田様も、皆様も、風邪など召さぬよう、良い年の瀬、新年をお迎えくださいますよう。

(近畿・えるびす)

(ホームページ掲示板より)

<月田のコメント>

(終演後の黒田清さんのエピソード、懐かしく嬉しく拝読させていただきました。今回は、1985年から大阪サンケイホールで続けてきた年末のコンサートの開催ができませんでした。東京でも大阪でも、何人かの方々から、年末コンサートの問合せをいただきました。えるびすさんのように、年一回のコンサートを心待ちにしてくださっている方がいるのですね。今年は、どこかで必ずコンサートを開くようがんばります。楽しみにしてくださいね。)

jogos

「月田秀子なるほど！クイズ」

BY きうびい

月田秀子ファンのみなさんこんにちは！今回はきうびいが、「月田秀子なるほど！クイズ」を考案。簡単なものもありますが少々ひっかけもあります。

年明けののんびりした午後、またはたまのお休みの夜、一人でこっそり盛り上がりましょう。

ではいきます。

1. 月田秀子の京都での定期ライブの場所の名前は？
A) パルチザン B) 野風僧 C) 巴里野郎
2. 月田秀子がポルトガルで実際に会ったファドの女王の名前は？
A) アリマヤ・ロドリゲス B) アマリア・ロドリゲス
C) アマリワ・アゲマス

以上初級。はい、簡単すぎましたね。ではもうすこしひねったもの。

3. 月田秀子がファドを歌うきっかけとなった曲、「暗いほしけ」。1954年製作の映画の主題歌です。その映画のタイトルは？
A) 過去の男 B) 過去を持つ愛情 C) 現在・過去・未来
4. 通算6枚のアルバムを発表した月田秀子。3枚目のリスボン現地録音のアルバムのタイトルは？
A) ファドメノール B) ファディスタニポニカ C) 私の憂い

5. 「ファドの匂いがしない」という歌詞が含まれる月田秀子がライブの1曲目でよく歌うファドの曲名は？

A) アロンアルファ B) アルファルファ C) アルファマ

難しいですか。少しやさしいにしましょう。

6. 今年月田秀子がライブを行わなかった都道府県は？

A) 福井県 B) 沖縄県 C) 宮城県

7. 「汽車は八時に出る」の日本語作詞をした五木寛之氏の著書は？

A) あばよモスクワ愚連隊 B) 内灘夫人 C) シークレット・ラブ

さあ、これから先はカルトクイズです。え？わからなかったらファド倶楽部にお問い合わせ……はダメです、終わりまで正解は見ないようにしてくださいね！

8. 月田秀子のよく飲むお気に入りポルトガルワインの名前は？

A) ドン・マルティニョ B) ジョセ・デ・ソーサ
C) ダン・ポルティコ

9. 月田秀子の「ついできてしまう」口癖は？

A) 「冗談でしょお」 B) 「そうかもわかんない」 C) 「違うでしょあーた」

さあ！いかがでしたか？何?! 全問正解!! もしかして、あなた月田秀子マニア……。

1. C 2. B 3. B 4. A 5. C 6. B 7. B 8. A 9. B

informação

●必読！リスボンからわたしの大好きな大ベテラン歌手、アルシンド・カルヴァーリョが、四谷「マヌエル」に登場します。ポルトガルの男性歌手が来日ライブをするのは初めての事です。人生の哀歓溢れる渋い歌声は、聴く人の心を理屈抜きに揺さぶります。月田は、23日からは関西での定期ライブの為、22日(火)に行きます。ご同行ご希望の方は、早めにファド倶楽部までご一報ください。月田もたまには客として聴く立場に回りたいと思います。

日時：2月22日(火)～26日(土) 開場：18:00

会場：四谷「マヌエル」

予約・問合せ：tel / 03-5276-2432

●東京「マヌエル」での定期ライブの曜日等が変わりました。別紙スケジュールをご参照の上、ご予約、ご来場くださいますようお願い申し上げます。

●ギタリストが、大阪は「福田晃一」、東京は「難波隆弘」になりました。

ポルトガルギターの上川保共々、和気あいあいと活動をして行きたいと思っています。これからの彼らの演奏をどうかお見守りくださいますよう。円熟味を増した月田のファドは、彼らに支えられてますます磨きがかかることでしょう。

今年もどうか、よろしくご声援、ご指導のほど
お願いいたします。

<編集後記>

新しい年がめでたいのではない。こうして新しい年を迎えることができるのが、ありがたいのだ。今年はどんな出会いが待っているのだろうか？ ころころ熱くなる時の多からんことを。

(月田)

月田秀子ファド倶楽部ホームページ

http://www.fado.jp/

■月田秀子ファド倶楽部ジャーナル 第44号

■2005年1月1日発行(季刊：年4回発行)

■編集・発行「月田秀子ファド倶楽部」事務局

■〒108-0075 東京都港区港南1-8-27 日新ビル1406号

■TEL&FAX 03-3458-9806

<月田秀子のスケジュール>

1月17日(月)	東京・渋谷「マヌエル」 *要予約 開場：18:00 ライブ：20:30～(約1時間)	予約・問合せ：tel:03-5738-0125 ライブチャージ：3,000円 ♪席数20名の小さなポルトガルの下町情緒溢れる家庭的な雰囲気、ライブをお楽しみいただけます♪
18日(火)	東京・四谷「マヌエル」 *要予約	
19日(水)	「NOITE DE SAUDADE Vol.15」 開場：18:00 ステージ：①20:30 ②21:30 ③22:30	予約・問合せ：tel:03-5276-2432 ライブチャージ：2,500円(各ステージ20分・入替なし) ♪ちよっぴりお洒落なリスボンとポルトの大きなアズレージョの壁画が素敵なレストランです。リスボンのcozinha(料理人)のクララさんがいつも笑顔でライブを見守ってくれています♪
26日(水)	京都・四条河原町「巴里野郎」 ステージ：①20:00 ②21:00 ③22:00	予約・問合せ：tel:075-361-3535 チャージ：3,500円(入れ替えなし) ♪京都の老舗シャンソンライブハウスでのライブも、20年目を迎えようとしています。平井マネージャー共々、ゆっくりくつろげるライブを目指して皆様のお越しをお待ちしています。
27日(木)	大阪・心斎橋「アートクラブ」 ステージ：20:00から3回(入れ替えなし)	予約・問合せ：tel:06-6212-2870 チャージ：2,800円 ♪大阪ミナミ、心斎橋となんばの中間にある7階のお店からは、御堂筋が見下ろせます。かなり広いお店で、7時までにご入店の時は、チャージ1000円引きです。播本ママが細腕一本でがんばっています♪
28日(金)	大阪・南方「三裕の館」 ステージ：①20:00 ②21:00	予約・問合せ：tel:06-6304-1745 料金：5,000円(ワイン・オードブル付) ♪20名入ったら一杯になってしまう家庭的な雰囲気の小さなお店です。マスターの小川土風氏亡き後、美代子ママがとびっきりの笑顔でお待ちしています。ポルトガルワイン飲み放題も嬉しい♪
29日(土)	滋賀・堅田「しづか楼」 *要予約 開場：16:30 開演：17:00	予約・問合せ：tel:077-572-1111 会費：12,000円(飲み物付き) ♪琵琶湖の冬の風物誌ともいえる「鴨すき」をつつきながらのファド、定員50名です。鴨すきにはたまらない組み合わせです♪
2月7日(月)	東京・渋谷「マヌエル」 *要予約 開場：18:00 ライブ：20:30～(約1時間)	予約・問合せ：tel:03-5738-0125 ライブチャージ：3,000円
8日(火)	東京・四谷「マヌエル」 *要予約	
9日(水)	「NOITE DE SAUDADE Vol.16」 開場：18:00 ステージ：①20:30 ②21:30 ③22:30	予約・問合せ：tel:03-5276-2432 ライブチャージ：2,500円(各ステージ20分・入替なし)
23日(水)	京都・四条河原町「巴里野郎」 ステージ：①20:00 ②21:00 ③22:00	予約・問合せ：tel:075-361-3535 チャージ：3,500円(入れ替えなし)
24日(木)	大阪・心斎橋「アートクラブ」 ステージ：20:00から3回(入れ替えなし)	予約・問合せ：tel:06-6212-2870 チャージ：2,800円
25日(金)	大阪・南方「三裕の館」 ステージ：①20:00 ②21:00	予約・問合せ：tel:06-6304-1745 料金：5,000円(ワイン・オードブル付)
26日(土)	神戸・三宮「あいり」 *要予約 開場：18:00 開演：19:00	予約・問合せ：tel:078-241-1898 料金：4,000円(料理・ドリンク付) ♪新装開店早々のライブです。ライブ終了後、自分で「蜜造酒」(「密」ではなく「蜜」)まで作ってしまったお酒大好き人間、福原ママの手作りのお料理をお楽しみいただけます。もちろんお酒は売るほどあります。毎回神戸っ子で賑わいます♪
3月7日(月)	東京・渋谷「マヌエル」 *要予約 開場：18:00 ライブ：20:30～(約1時間)	予約・問合せ：tel:03-5738-0125 ライブチャージ：3,000円
8日(火)	東京・四谷「マヌエル」 *要予約	
9日(水)	「NOITE DE SAUDADE Vol.17」 開場：18:00 ステージ：①20:30 ②21:30 ③22:30	予約・問合せ：tel:03-5276-2432 ライブチャージ：2,500円(各ステージ20分・入替なし)
23日(水)	京都・四条河原町「巴里野郎」 ステージ：①20:00 ②21:00 ③22:00	予約・問合せ：tel:075-361-3535 チャージ：3,500円(入れ替えなし)
24日(木)	大阪・心斎橋「アートクラブ」 ステージ：20:00から3回(入れ替えなし)	予約・問合せ：tel:06-6212-2870 チャージ：2,800円(入れ替えなし)